

九州大学理学部における気象学の教育と研究

(気象百年史への一つの補遺)

澤田龍吉

昨年、刊行された気象百年史(気象庁)の第10章9節の「大学における気象学研究と教育」の項をみると、九州大学の記事があるが、農学部における研究と教育だけが記録されていて、理学部に関する記事が全く欠けている。欠けた原因には、色々であるのであろうが、この時点で大切なのは、そのせんさくでなくて、むしろ欠けた部分を少しでも補って、後日により完全な百年史を残すことにあるかと思ひ、次のようなメモを投稿する。

九州帝国大学に理学部が設置されたのは、昭和14年であるが、当初4講座で発足した物理学教室が6講座に拡充され、その第6講座として「地球物理学および気象学」講座が、開設されたのは昭和16年である。

教授には伊藤徳之助が、助教授には吉山良一が就任し、気象学の教育と研究が地球物理学の一部として開始された。昭和24年、大学は九州大学と改称され、この講座の名称も「地球物理学」となったが、内容が変わったわけではなかった。戦後間もなく伊藤教授が、わが国で初めて人工降雨実験を試みたことは特記すべきことである。

伊藤徳之助教授は昭和33年に停年退官し、後任の教授として翌34年に気象庁より沢田龍吉が着任した。この頃から主として教授は気象学を、助教授は火山・地震学を担当することになった。

九州大学理学部における大気物理学の教育と研究の体制が全く新しい局面を迎えたのは昭和40年である。この年の4月に物理学教室に新たに大気物理学講座が開設されて、気象学の教育と研究が初めて独立し、その扱う分野も広くなり、したがって名称も気象学から大気物理学に変わった。教授には沢田龍吉が地球物理学講座より転出就任し、助教授には東京大学より松野太郎¹⁾が着任した。助手は、松島晟²⁾および瓜生道也であった。

一方、地球物理学講座では沢田龍吉教授転出後、教授として電波研究所より広野求和が着任し、助教授には同志社大学より北村泰一が着任した。助手は藤原玄夫で陣

容は全く一変し、教育および研究の分野も超高層大気および磁気圏、惑星間空間の物理学に重点が移った。

こうして、大気物理学講座と地球物理学講座の二講座で、広い意味での大気物理学の教育と研究を担当することになり、現在に至っている。なお現在の編成、研究分野および設備の概要を示すと次の通りである。

(括内の数字は着任の年月日)

講 座		大気物理学	地球物理学
教官	教 授	澤田龍吉 (40. 4. 1~)	広野求和 (42. 11. 16~)
	助教授	瓜生道也 (49. 2. 1~)	北村泰一 (44. 3. 1~)
	助 手	宮原三郎 (47. 6. 1~)	藤原玄夫 (43. 4. 1~) (他に火山関係1名)
主要研究分野		大気振動、惑星波、内部重力波、地球流体力学など	レーザーによる大気組成、電離圏磁気圏の電磁流体力学など
主要設備		廻転水槽 大型1, 小型3	レーザー・レーダー、超伝導磁力計

なお、大学院修士および博士課程には両講座とも数名の学生がいる。

注：(1) 46年、転出

(2) 42年、転出